おてら　第１１２号　令和７年　年始号　発行　浄土真宗本願寺派 蒲原 浄光寺（TEL 025-229-0629）

おてら

常例十六日講
写経会
一月、二月、八月はお休み致します

執着

住職　蒲原　霊英

前号で子宮筋腫のことを大袈裟に書いたばかりに、多くの方々から心配と励ましのお言葉をいただきました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。五十歳を超えて、更年期障害だけでなく、これから先はどんどん体にガタが来るでしょう。そこで、重い重い腰を上げて十一月から断捨離を始めました。子供達の物は本人達がまだ置いておいてほしいとのことで取っておき、自分の物はどんどん捨てたりリサイクルショップに持って行ったりして、だいぶスッキリしました。断捨離して分かることは、いかに不必要な物に執着しているかということです。「もったいない」とか「いつか使うだろう」とかと言って長年しまい込んでいても、きっとこの先も使うことなんてないのに。結局、私にとって本当に必要な物なんてほんの少しなのです。

仏教では「執着」を「しゅうじゃく」と読み、苦しみを生む原因として捉えられます。私達が執着しているものは、物だけでなく、人、身体（若さや健康）、財産、権威・権力、知識等々。そして究極はこの命です。すべて「私の○○」に執着して生きているのです。でも、よく考えてみると、それらのものは偶々縁有って「私の○○」になっているだけで、いずれ縁が無くなれば私から離れてゆきます。私の体も無数の微生物と共生して成り立っているので、私一人のものとも言えず、私の体も命も私の思いのままにはなりません。これらのことは、「諸行無常（すべてものは常に移り変わる）」や「諸法無我（すべてのものは因縁によって生じ不変の実体は無い）」として、仏教で説かれる真理です。この真理を聞けば、誰しも「そりゃそうだ」と頭では理解できるでしょう。しかし、常に心に留め、肝に銘じておけるかと言われると、なかなか難しいのではないでしょうか。だから、また「私の○○」に執着し続けるのです。そして、「私の○○」がいつも私の思うように満たされていないと満足できず、また、満たされたら満たされたで、今度はそれが欠けたり無くなったりしないかと不安になる。結局どのみちいつも不平、不満、愚痴がこぼれる。自分で勝手に執着して、自分で勝手に苦しんでいるのです。

そんな私達を、阿弥陀様はいつも智慧の光で照らし続けてくださっています。自分では見たくない愚かな私の姿を照らし出し、「見てみなさい」と。そして、「何が大切なのか、何を大切にして、どこに向かって歩んでゆくのかをしっかりと見つめてみよ」と。そのことをすぐに忘れてしまう私達であるからこそ、「南無阿弥陀仏」と阿弥陀様のお名前を喚ばせていただくのです。絶えず自己を見直す、お念仏申す生活を送らせていただきましょう。合掌

能登半島地震支援センター

能登半島地震発生直後の昨年一月八日、金沢別院に能登半島地震支援センターが設置され、この一年、被災地への支援物資の搬入や被害を受けた建物や家財の片付け作業など復旧支援活動を行ってきました。センターのX（エックス）やインスタグラムを見てみると、今現在も毎日のように、各所で実に様々な活動をされていることが分かります。家や納屋の片付けや災害ゴミの搬出作業も有りますが、無事だったお仏壇の搬出作業もたくさん有るようです。家は解体しなければならなくなっても、大事なお仏壇が無事だったことに、安堵されていた方も大勢いらっしゃいました。地震の被害はもちろん、ちょうど九月の秋彼岸に半島北部を襲った豪雨の爪痕も深く、十二月になっても、まだ土嚢に袋詰めされた土砂の運搬が行われていました。

そんな中、「こころのケアを」と、十月から新たに、七尾市、穴水町、能登町、珠洲市の四市町の仮設住宅の集会所、公民館や寺院でサロン活動（お茶会）が開始されました。サロン活動は、仮設住宅での生活が続く中、入居者が孤立しないようにと交流の場を設けて新たなコミュニティー作りを支援する他、入居者の不安や苦悩に寄り添う傾聴活動を行っています。宗派ではこれまで、東日本大震災の被災地などでサロン活動を実施しており、その経験を生かした活動となります。これに伴い、これまでの復旧作業に携わるボランティアに加え、サロン活動を手伝う傾聴ボランティアも募集していますが、まだまだ手が足りない状況とのことです。

『教行信証』が生まれるまで 2

親鸞聖人は生涯を通じてたくさんのお聖教を書き写されており、そのほとんどの最後の所に、それを書き終えられた年月日とともに、その時のご自身の年齢を書き込まれています。例えば、現在西本願寺に所蔵されている聖人自筆の『三経往生文類』の末尾には、書き終わられた「建長七歳八月六日」の日付とともに、「愚禿親鸞八十三歳」とその時の年齢を書かれています。逆算すると、聖人が浄土真宗の教えを体系的に著された『教行信証』の全体構想をほぼ完成された、いわゆる浄土真宗の「立教開宗」と位置付けられている元仁元年（一二二四）には、聖人は五十二歳です。そして、聖人は西暦一一七三年、和暦でしたら承安三年のご誕生となります。他の書物に書かれている年代と年齢も逆算するとすべてこの年になるので、間違いないと思われます。そしてこの年齢は、今の私達が通常用いている満年齢ではなく、いわゆる「数え年」で、生まれた年が一歳になります。

日本を含む東アジア地域では、古くから「0」という概念が希薄で、「0」は、存在しない「無」と認識されていました。ですから、誕生すると生命が存在して、「無」ではないので、その時点で一歳として年齢を数えます。そして、正月一日に年が改まると皆が一斉に一つ年が増えるのです。このように当時の人たちは誕生日を基準に年齢を数えていなかったので、今の私たちのように誕生日をはっきりと知っている人はほとんどいなかったようです。

このような当時の習慣から聖人の誕生日についてははっきりとした記録が残っていませんでしたが、江戸時代になってから、聖人の誕生日を四月一日だったとされるようになりました。そして、明治七年に、旧暦の承安三年四月一日を新暦に換算した五月二十一日が聖人の誕生日とされたのです。（本願寺新報より一部修正転載）